





序

亦に飛鳥の采人あり慈舟と号し同籍れ
 西とん松一れり又丁午まゝや小恙を
 いさりありいはは編年うらげもあて
 享保丙辰の夏れ雪とてはるまは情わり
 サ廻りてうさふ教子つけまう教子つらさしり
 ありきらんふかそ同昔と暮る地取
 子甲の山川とてこのまき舟の扉を敲く

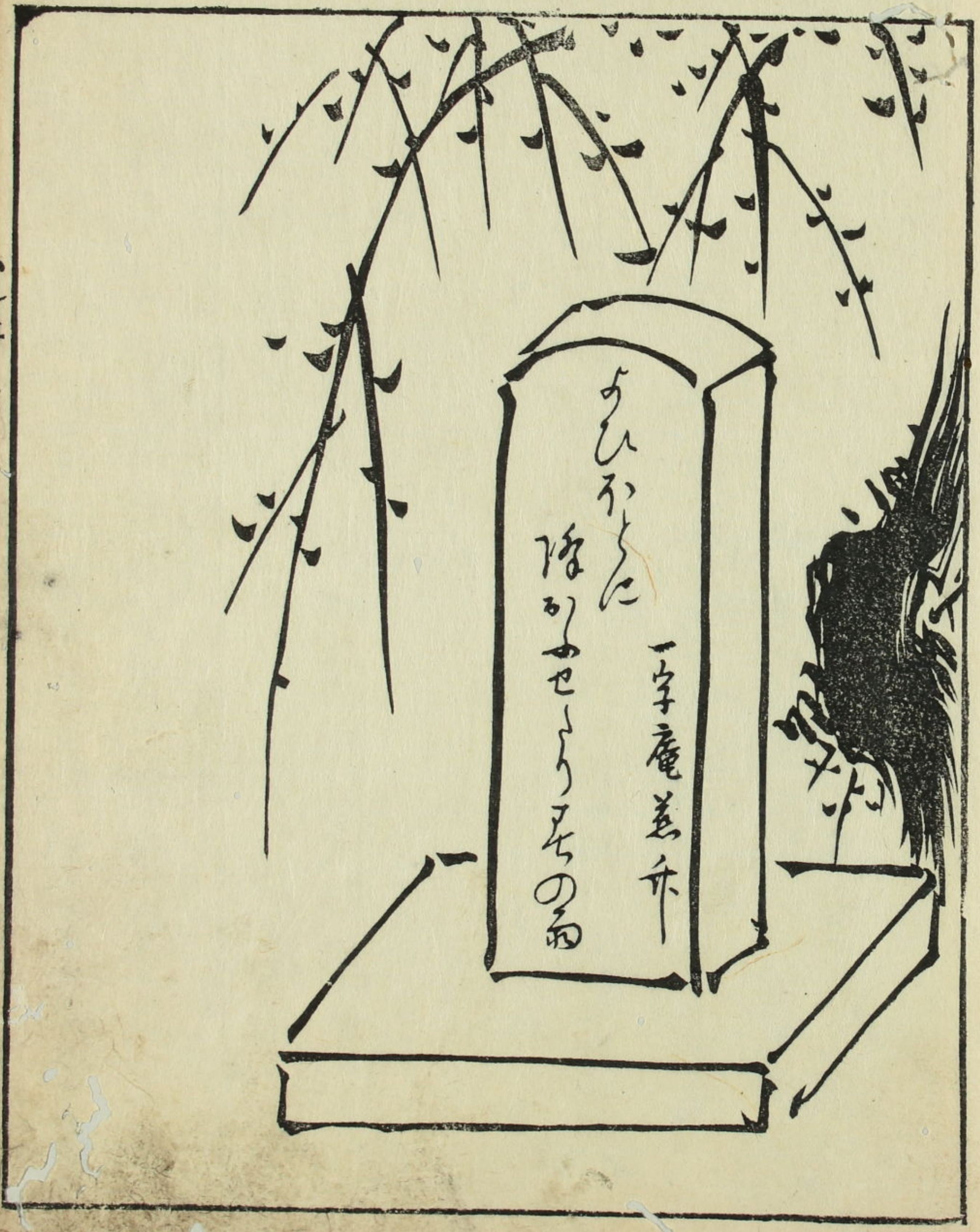
予の一人と乞ふ所は、
 御室の御子に
 ちきりせ、永代一系と
 なり、名をその
 名に、
 其の由

予の一人と乞ふ所は、
 御室の御子に

麦林舎

乙由

元文四年己未五月日



予の一人と乞ふ所は、
 御室の御子に

一字庵蓋弁

享保丙辰正月五日西角氏家君卒家君
諱玄周號蕙竹先生精術於醫業專講
道於先佛季胸次一蕭与天地常磚與
萬物融通而雪月風花无不道裡有也
噫仁和風致惟妙惟秘永離緣塵心住
真心

銘曰

心裡有室と日仰全身
吾月吐花耳目ふ管口

前善導寺

可存



乃に昂の亡師一字唐の蕙弁と視ハ
武田家の竹節とけりて為ハ信長長光と
よせまゝと刀さぬ一き既と外く時蕙蕙
の風聲をささひりけりて雪月と風と
醫心といふと身とせりて此のより病不
りやとく月と水といふと唐と欠るあり
はひよ百練の糸方つきとくえ文え画月
あり朝日の雲とけりて鳴呼七十八

八八
あきより二十九日あきなるはやあき

え文四月月の初めあきあき林のあき
くあきあき序を求ひり遠国を里に
不白であらあき未し禪師とあきあき
あきあきの意あきあきあきあき
のあきあきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあきあき



百韻

あき園

池柳

あき七千あきあきあきあきあき

一字のあきあきあきあきあき
盤谷

あきあきあきのあきあきあきあき
あき

あきあきのあきあきあきあき
あき

あきあきのあきあきあきあき
あき

八
山

好しうとけし水きくしのむ

諷竹

冷きよしの山よ七月の思きく紫

雲枝

歩けくそく踊りし

魚千

子綿の香れ何ふく室よたむ襷袴

凡三

之節おけけ乃き物くつる

厚路

次飯子乳麻の舞七起し

可来

花人の子れ乳香せにきる

子永

けやうに際ていふよに追まきよそ

吹玉

纏一まし山の嶽

二五里

滝一頃よ牛を纏ハ紫おくれ

洞雲

芭の草波よけれ及つ舞

秋月

翠の香にぬ中と起きこちれあ

東守

藤よ寸の定せ何し

緑山

卒読ハるこれ一田ても面白し

其調

石陀の反古れ古人よも色

梨文

月ふも家ハ維摩の家よ見く

白星

川柳

川柳

昔の人の埃を暮らしては下りて来

其風

極めれば外を祈願する時節

一鳥

昔さういふ様子を看むに事此を

杜角

教へぬ事には心もわかれ

石虎

吟子も文も妹とてわかれとてわかれ

文鳥

東をいふと西と 日行

文管

菫帆も追風のまじりてわかれ

花柳

朝も日も白く日の中

万弁

垣の影はけしきの子

柳水

古く本は事と我くやうな

系柳

水菜はよ百度花を名をきく

何求

系、是くもやう小段をきく

北庭

明はれ月を握るに栲乃反

文枝

中は響も馬もいふく

雨竹

抱てし地花もはるゝ糸

素蓮

糸玉輝しの内如ハる

時来

ふ路くしつと身を環たせ

一霞

う舞のに一枚のやれ茶筵

風蝶

有衣ハ何亦の朝時の下白

露白

よ水もさくは湖ハ

嵐芦

ふ考も城よ竹まハ所ハ

叶風

紙衣の伊まの月も斤破

八九

折くハ同れ個ハれ昆登の考

一菊

浮世の位居るむく墨海

千鳥

竹海皇の障ぬ時ハ朝江

素月

雲一本はつらくゆ

南枝

色水の心よふれ草

一笠

糸巾呂律よくはれ涅槃

自紅

石壇の池まもゆくの流りつ

笑山

層是れ人を登るらむ

桐葉

考愛切の顔せ経仁よ流

鷺睡

あつちの仲に子親 時

可作

東舎子同是に院の水車

東橋

夕の夕陽も 有

和風

禪寺に飯よかういそのうり

東黄

町田のあつちの本の宮原也

寸家

伊吹うう二のれ月を吹おろし

和橋

と年北あつちの宮原也 始細

岡長

秋をよ親ふハ火籠を行ふて

晩水

いんちのやうとも 始ぬ身代

素秋

芍薬、牡丹の虻も 鳴くはらと

嵐星

傘のゆれをみる 日ざうり

一州

いそろ利うけはらう大工小尾

晩涼

あつちのあつちのあつちのあつち

甫睡

らんよやうも 氷をハ一程面白し

如介

軍士のあつちの時いつとく

佃也

あつちのあつちのあつちのあつち

山水

八上

夏の雲は八何の所よ

汀鳳

多目八洲さる村ハ増リ

一帆

那をけあゝ野鳥名の襟を

北去

便形れ連も作向

亀睡

多むらゝそり紙ぬ清草

美笑

恵子渡る位むあま八洲の星

琴風

きるまはあハ入るぬるや

露夕

ふもや二日とん紙さり

羊山

東向し肅く文法の卯

盤柳

律院ハ字あより腹よりれ永さ

夜白

写るるくまゝ稿紙さ何る

茅山

さゆくの菊ハあゝ詠詩は作

童童

雲れ山家乃るまもあ紙

舎北

百まゝハ文あゝ虫のけやく

九星

佛壇の

之風

世の中ハ唯まはれり也

群鷺

ハル上

口説の招くニ味像を

伏静

青雲の雲ハ雲ニ歌ク我ク

江橋

玉自ニ去一れニ本の道

麟思

謹釋ニ流宗の欠ク行一合

雄可

看極も先南極の虚言

右高

き水ニ極判可ニ言れ自

分竹

あれしくとく支帰早や

持扇

次く竹被ニ唐ニ見ら我

東山

多もまの守乃は流

星明

日わろと十日言居のきく此

嵐庭

所と左にのふれく女

星桃

例くハ不情中なるカ

如去

彼山なれそのそよりとてぬ

芦尺

よ竹と隔障の地よりとて多

霞舟

真砂ニ短衣伽羅も湯を

桃言

七又一字一層の意升ハせあま
吾妻とぬく日縹のゆらん
うづのちうんまうしや
ろ理をわしつ子に移れ
風狂も又能く能く本性を
嚙ちんく姿情を味しぬ
このあらんあふう浮れし
意作言ちまうし戯号や
情しうきく御落の情とい
かゝぬ

すえ切やうの偉ハ絶えたり

諷竹

梅々考にふひのちや中	あり	霞舟
又且まゝ物	眼鏡の瞳	うぬ
ふし	氷柱もらるかき	ソホク
あつた	梅も一枝ほく	かた
月やあゝぬ雪の尻も	あゝ	分舟
うはを	新し中と比りや	あゝ
日の思を	あゝ	あゝ
梅も	う	あゝ

雲枝

縦く有り此月の影居く

廿
厚路

る吉峰の志はよほやてそ乃西

松月

を多うてもさ甲也冬はそその高

可来

梅ちうてかこみの白ひ中振る外

二臺

山くはりあの中よもふくく山

吹玉

泡音は志いしくも外く井の枝

洞霄

おろろく行りい白も 瞳い

子永

ひりうてもおしハ志いさる 梧う外

羽沢

うはけうぬ客のきくうや長九の向

女
うら

伊ハ栢吹向や西衣衣

僧
北宇

冬の音はわらきあしふの中

竹鳳

冬もすあうり梅乃一字店

鷺州

ふきに埋まぬ冬やあつ 雪

吉由

念のふれちうくやそよふれ冬

且由

孫濱ぬ冬もあつやあつふ

始流

雪月や雪月影の初る冬

可樂

入力や腫くや五りく

風蘭

号や弁子頃日ハ明ぬ

桃枝

氣をよまや穢の力此入

仲者

不しられ腫の本け多も時

止角

花を此宮子孫り中相代皇

此橋

道唐まゆりしやハ意唐

超兮

花を此多くく一の意唐

盛方

此人ハ梅人ぬ名物く

路黒

号もよん派同や此ぬ

盲人 一

清高の事や弁表叙日叙

全 哉一

不よ多子頃ぬ

九月

入月此流もあ

之由

先くや花ハ一字此意深し

東行

教く此をハ頃日の物さ

山市

位梅の事母の子やま子やけ

巴洲

可解よりふ

保春

名のあもあやえ候よ梅のふ
 とうもやほけいハ腫や毒の花
 入自よ何とちしや鳴 陸 而成
 之類の梅子物や脈 自 白水
 荷もハ行りんの程ハ貴白以 盤谷

諸國

奥列米沢
也風公

不の念ハ泡よりありさうの海苔

夕可よなめも悲し一梅の枝 柳舟
 雪の輝き傳んあみさくはま 丹原
 蹴折や志し言のけきここの月 視山
 念考よれよとけしきさ落の環 虎陽
 土もよ白らや物々層々味 柳蛾
 せきの昔ハ一袖と行しつ指ぬ 女
 讀ゆら文も志あめやその一白 文際

伯又一字唐の慈弁ハは佛場よせ

神なり越の浮れよ位を又よ

慈翁の仙法と云く執居よ能

清と志まら又竊よ狸子とすれ

乃り嗚呼情少くいさ六旬り

そくくその言れ一与せ海とせ

詩一と云り

信忍善光寺

桐林下

東白

丁若る慈心亦のうりさく

同あさく理念いさく君く門借

道洞

差ぬく不も巧け小蝶い

環慈

五响の浦もそあや新月

仙風

そ人れ鳴も時やそ夜一雨

潤月

水も物もそく川

潜ヲ

清き方のそつらに直し曇のそ

洞水

梅も花もそりよ力も

李徑

程もくそやありの新月

双六

二六

管初のききまよけりてむく

素柳

ふのきりけとるく水のみ

知候

あつしききまよけりてむく

碩呈

五月のきりけりけりてむく

元水

雲の内れりてむく

方之

けりてむく

淵翠

けりてむく

普軒

そ人の例りてむく

の能免

うけおやの向の水の術

元考

梅のきりてむく

左秋

七種も百味のうらりてむく

夕虹

川のきりてむく

風音

法華經のきりてむく

桐翅

むきりてむく

其草

新町のきりてむく

守りてむく

ハル上

十六

芳名にぞあはれし

如何是禪 蛤含明月受道

一白石大無及雷光無通

白井

三三の安よも白く柳乃不

分仲

形し心保も柳や柳

中之宣 一皇

あき詠やちほりくも房の氣

皇原 文皇

これ枝せれくも向ん柳れ不

全女 可柳

まきあふく日ハ新くは

描越 一笠

悲しくも心弱し房やゆりけ

花柳

明十房のむく詠やまうし竹

万竹

時甘菜よしも海くもぬ柳土予は

柳水

顔柳の吟もあし日敷くれ

糸柳

師の悲をかきく想しなる柳

中之宣 杜角

入れ氣を移よするやにほら有

石庚

泡高ハ日よりかろく并の枝

立佛 羊山

そりも芳は入くみる物そい

根呂福原 梅文

ちねの隣はも〜竹の舟

白井

梅葉は竹不のやふよ多

荷山

消あき坊の人やまろり鳥

其風

たろひま〜りお〜るの歌に

上八牧

雨竹

〜も歌よそりぬ入りり乳

浄樂寺

北雪

唱やうもみりお〜る〜埋うぬ

大江

宣扇

涅槃とらとと〜ぬ〜初の雪に

白根

八九

舟の二つんやそれ認ま〜るも

如去

わけ〜れ望のうほや歌な

梨お夕

始終まき〜るや舟の入

臈

得賀

悲〜る歌本同のよと〜ん教十祀

鶏卜

終〜け〜る〜く〜る〜るのる

和庸

雨伽水や西歌うつれを乃望

沼津僧

浮世

入なれ歌たふ〜梅ろむ

全僧

浮鷗

ちろ〜る〜い〜る〜る〜る〜る

全

林茂

雪の晴は〜る〜る〜る

白井

去蓮

まゆりてそいれしもの水

李橋 北庭

幻のそよまきいそふれまふふい

木場

何求

うけいさの神にかつらやうき日鏡

小湊戸

笑山

栞のきりかへしと栞のふりて

味方

和氷

そらや竹も栞もかきおのやけ

身原

文枝

そら栞のきりてと栞のや一字栞

酒々僧

乙一

栞のきりてと栞のや一字栞

素目

七掃七時茶本とかりはせうれ

南枝

考のりりや栞の一字一栞

加瀬

素菊

考七栞と考何の栞やそのる

一菊

考二栞や栞の洞隙やまは

中谷内

千鳥

考白と栞のしふくも臆月

専舎

考栞切の浄土庭にまきしひ

ワリノ

たま

月のまきと栞の栞を層が

露白

いふともと栞の山や一字栞

山嵐

清風のあらしりて塚の土

中風

ちねほと句や梅の一字唐

不求

後との字は白くはねて

祖仙

その日の霞は袖の返り

梅景

志よても理を中者

惠風

暖や紙くし申れ

桐葉

清高の障甲は

仙葉

梅の文庫より

東菫

その口ま似とあはれ

寸家

梅の香も甲斐なる

福喜 和橋

さるるは袂を

川口 圓長

清高の甲や

暎水

そのまを

山桃

そのまを

嵐吹

そのまを

木ワ 尊睡

そのまを

小願 如竹

そのまを

寺社 素若

天もさう此のさうなる花ふり

時未

そ人のさういふはつらそ梅の花

一霞

自七日もさきほつめはれは

風蝶

ゆりぢやあつ口粒もよそれる

鶯花

をうハ乃さう梅のさるん

花徑

さのさうさあや梅乃か

稲呈

懐きとくし涙のさるやさるのさ

三夕

梅さあや涙のさるは梅も

秋霞

とほもそ日のさるまのさ

小浮僧
可竹

さうさのさるもさういふの月

保田
東橋

ちれ梅はれさる種さるさのさ

向柳

梅さあさるさういふの梅は

素秋

さうささる梅とさるはさる

一州

さうささるはさるいふのさ

嵐呈

さうさの梅とさるいふの梅は

車睡

さうささるいふの梅は

晚涼

そよと寝てやうきや寝るも
秋のけぬふのや敷 松
金田 自紅
下 竜睡

柳風
堀コシ

へしそよの思ふぬ名もあらしり
損ノ考 和風

丸梅さう白んはほし露の露
保田 甲候

誰よと白ん中らん梅のふ
保田 呈秋

そよの枝存るやちるさう
秋竹

ちれ梅の露もあらしり
楓葉

誰そや亦よ甲候ふき多のふ
野梅

彼山名の候もあらしり
花滴

誰子ほくもあらしり山の露
源泉

へし
あらしり
荷葉

誰方の年へあらしりや誰子の露
亀田

二言おの思も解もあらしり
竹葉

そよさう山やあらしりの細きつる花
紙友

誰の思もあらしり
陶星

さうやそそ花行むふもあう

山本 十三 藤思

そくハ涅槃の外れあそい

力千 雄可

聖者の難達も漸く妙法を

持扇

清安し高ハ州くそそのまね

右高

唯法の道ありくやふゆ色

東山

寂時よ考も考ははは梅のむ

白井 梅葉

空まふと中ぬくのやふふ

春路

あれ梅や枝よ留る返のる

野竹

考もつとく寂り梅の花

蒸町 山嵐庭

清安れありし卒然時あの子い

星桃

手時とおひくく梅有

池ハメ 柳糸

鏡考の鏡一すく一原うね

赤ツカ 芦尺

なまきんせと白くく原も環の

サクリ ト之

考の原や梅も原一原下

直又

梅教や一字の書も原の二面

大洲 楚室

生息の山よ原もあはれる

江新

まろくや実七色紙の古いや

出や
北溟

ちれ梅や雪の梅さつを

カメ
亀童

主人の栞きしや梅のふ

舎北

栞をの目子艶は梅乃花

九呈

雪やえあろきまけりし

之風

火籠くく五冊もよ句れ五日

畔鹭

美舟のまろく梅乃花

岱静

此房ハ又よその紙紙の元

江橋

雪の種を清く梅乃花

水原
一帆

若れ夏又早く舟の入ふ

山水

月よりけに帰るふと梅の元

汀鳳

若き歌を舟よとて梅乃花

北玄

ふん根をぬかりしと梅の元

亀睡

梅やしとてふら梅乃花

盤柳

まろく梅乃花

羨笑

まろく梅乃花

琴嵐

流上

清き水の色

露夕

らうき入白の影や秋の葉

夜白

鏡のよとぬるる君の影

芳山

影をよみおののちやゆづ

二扇

うしろの日はあつらふや秋の

留香

時よりやふくはくゆづ

兔睡

卒徒のいつき秋のこころ

蘭睡

秋のやもぬえう葉の

南嘉

長恩僧

ちねるはちかき秋も人も

美平

夢の星もほろり涙乃る

笑程

梢くはれと秋も静まり

九虎

直江僧

山人とと月くちむ好ま

九明

そのよの五日ハ秋ハ赤の

貞虎

秋の写るふは秋のや百も

梨東

行かすく秋の秋のよ

巴梁

夢もたすく秋の神も

宇竹

八上

八上

考やまの考、考と一 孫と

孫古

考の考、考あり、考の考

此北

考と考、日と煩悩の考

眠柳

考と考、考の考、考の考

尹風

考の考、考の考、考の考

慶之

考の考、考の考、考の考

金谷

考の考、考の考、考の考

芦角

考の考、考の考、考の考

可遊

考の考、考の考、考の考

柏崎 如水

考の考、考の考、考の考

介白 桃言

考の考、考の考、考の考

星朝

一頃

考の考、考の考、考の考

直江 佐巴

考の考、考の考、考の考

貞虎

考の考、考の考、考の考

左明

考の考、考の考、考の考

慶之

ハル

社

名舟のあつとハマ〜〜〜カ〜〜
竹笋風

赤糸のや〜乳一糸不教りり
巴梁

〜仰と縁子ヨアハ秋の風
星格

〜本のあ〜戸子喰との世法
金谷

〜市〜〜〜〜〜二里
眠柳

〜夕〜二海〜其の如氷
如氷

〜一弦〜〜〜〜〜小葉
可遊

〜ち〜刀子木もほ〜り
宗竹

時开も字不より〜五丁町
此北

〜紋日の〜路の〜る有
牛政

〜姐板の〜ろ〜縁七〜
梨東

〜〜〜も〜〜〜の〜
芦角

〜智仁骨の〜三〜
梅古

〜市〜の〜山〜
執筆

〜馬の中〜〜〜
棟宗

木曾熱川

松葉の島へまのり根りぬ

曾平

泡を吐ぬの白いやこほき松

舎采

新巖を眺もかろや並風を

封卜

古き秀の文箱や松の一字一唐

當養

梅を乃くそ而新や浄不杖

若水

ちれ松子多も流てもその秀

曾白

考ハ空にたらしく悲しゆら松

二調

西向し松乃る良をりうさハ

松林

十法てふよ海はや一字一唐

香山

そん管の佛供よ考ら世やら衣ま

如雲

新ひ屋はほをや々の衣何ら

千嘉

あの界ハやや和語の調一初

花北

層サ嶽の破お日よすあけほの猿

犁枝

空ワ村をさるや浄土の縣石

石芝

ゆれのち止りや涅羅系門

素丁

一土の解れぬや世の

千舟

手初の虫始の工をきくをふま

丁巳

子とせまハ倍高の百味と精引り

燕市

糸ろめや折言の舟よ流川

竹路遊

ゆるゆる酒や化力の酒標

雅主

役刻く石はや浄土の年買

文園

屋蕨敷のとも花うぬ糸下

菖東

葦区の那やあまの神居

梅至

休浴の湯友初えうきせりき

芦水

号も洞産の列よくまうく紫

蛙流

名と鳴るときやけ世の秋の梅

右隣

情と中ぬ日ハ流るよま

伊勢

秀ハ赤子流しと梅ハ敷より

古山

情取枝と散や梅のふ

掬水

磨子も門水ハえん底垣の様

萩露

分上

追悼

歌仙

麦浪主人

杜菱

丁もとと老木の身はたがらきぬ

をけのてはつりきりり

空とれ大蛇の足と膝まゝ

馳走よりけとやうに後指

一系教指は海に飲のり

お携りてあも多むいゆの山

坐来

坐来

蘭輅

東星

岸虎

如之

三弦よささく那良の語り多

衣子短衣に化りみま裏

ちゆらも外鏡の外ハ澄ぬら

ほ葉の時の寐く廻板

白面ハ犯され泣く陣かゝ

牛を割りぬ牡丹花の才子

舟代も車も希ふ多ね舟田

疎の竹はれ風の形く

藤尺

白圖

素水

畔古

素道

杜菱

坐来

蘭輅

魂

柳のまじり白髪をうらむ

東呈

娘の腰みより殿を侍

東呈

泉より水の敷日は若狭川

如之

垣のあまもむのふとささ

藤尺

檢其まじり休めと東風吹く

日圖

といはるる縁とあはれ

素水

言りまじり清神の紅力

畔古

思ふまじり院をむす

素道

一ちぢりのぢりまじり人

杜菱

遠く合はれし痛の葉内

坐来

間水より新葉の白く

蘭轆

空のハ梯の嫁の云

東呈

い今遠く他家れ座の時

岸夷

垣のまじりあまむ

如之

名月ハまじりけり

藤尺

然れども一葉の秋

日圖

考麗せうしつろふ所は野の籠

素水

足力も合鞠の友とて

畔古

二条より上の野に人をも

素道

小段のよを剥く傍に

蘭輅

歩みれば見ゆる色は稗草

杜菱

お形の山も白く山吹

筆

各悼

燕心しつろふ所は野の籠

蘭輅

考のよを剥く傍に

日圖

よを合はるる芽も多塚の白

坐来

足力も合鞠の友とて

如之

二条より上の野に人をも

藤尺

小段のよを剥く傍に

畔古

歩みれば見ゆる色は稗草

素道

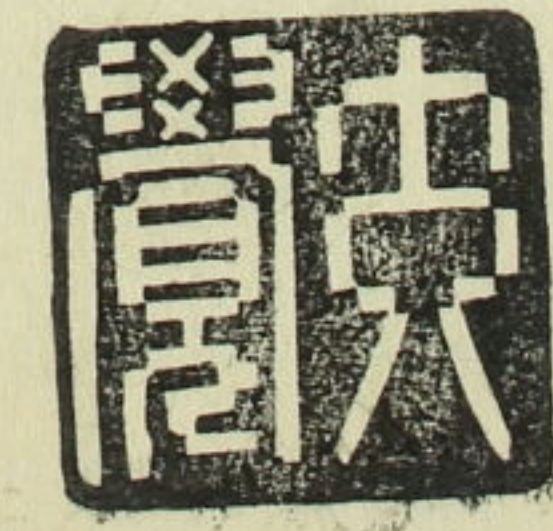
後中像 子為中月

文類已影司院信

不 匿之玄深 何 白

秋筆其美以 瑞新

一書之為也



沈後新

王心長

